

第 5 章

新しい授業プログラムの試み



第5章 新しい授業プログラムの試み

遠隔講義・e-learning の研究と実践

～eラーニング実験授業「変異する日本現代小説」報告～

高等教育研究企画センター学外連携推進部門長
人文学部 中村三春

はじめに

「相互研鑽による教養教育の飛躍を目指して」が、山形大学FDの合い言葉です。これは要するに、単に上意下達式に改善を進めるのではなく、まず隗より始めて、お互いにその成果を分かち合うということです。まず隗より、というわけで、高等教育研究企画センター学外連携推進部門を担当し、大学コンソーシアムやまがたで運営委員会の仕事をしているこの私自身が、自分の授業を、単位互換eラーニングの実験授業とすることになったわけです。

大学コンソーシアムやまがたでは、平成18年度から全参加大学の間で単位互換制度を発足させる予定です。また、地域ネットワークFD“樹氷”では、授業改善の一環として、eラーニングのシステムとコンテンツ開発を事業の一つとしています。現在のところ、コンソーシアムで単位互換やeラーニングの制度的な枠組みを定め、“樹氷”の予算によってシステム構築やスタッフ・TAの配置などを担当する、という形になっています。

開講までの準備

山形大学の教養教育は全学出席方式ですが、山形・小白川地区の3学部が、教養教育責任学部として、多くの授業を担当しています。私は「文化・行動」の領域で、前・後期1コマずつを担当し、これまで、前期は多数の学生を受け入れる映像論を「文化論」として出講し、後期はやや高度で深く学びたい学生を対象として日本文学関係の授業を「文学」として実施してきました。学生は現代文学への関心が高いので、テーマを「変異する日本現代小説」とし、2～3回完結で6人の作家を取り上げる方式としました。



シラバスを作成する段階で考えていたのはここまでです。すなわち、eラーニング化する予定も意思も、その段階では全くありませんでした。ただし、eラーニング化するか否かに

関わりなく、私は授業の際に多くのプリント資料を作成・配付し、また完全にパワーポイントのスライドとワープロの画面をスクリーンに投影する仕方です。結果的にはそのことが功を奏し、本番ではなく実験であるということもあり、授業そのものにはほとんど手を加える必要はなかったのです。

システムの構築と授業の形式

授業の教室である山形大学教養教育1号館127番教室は、もともとTV会議システムを用いたリモート講義用の教室であり、この授業も米沢地区・鶴岡地区へのリモート授業としました。eラーニングの方は、基本的にインターネットを利用します。“樹氷”では、ストリーミングサーバ、LMS (Learning Management System = 授業支援システム)、カメラ等の設備と、担当スタッフとTAの経費を負担しました。さらに、教養教育担当係からも支援を受けています。



コンテンツの画面・音声構成上は、従来のリモート講義の場合とほとんど同じものです。すなわち、スライドのスクリーンと、その横に教員の姿が映っているビデオに、実際の講義の音声を重ねるというもので、eラーニングのコンテンツとしては、最も素朴(原始的)なものと言えます。この方法の利点は、担当教員はほとんど何もシステムにタッチする必要がなく、スタッフ・TAも、システムを立ち上げてセットアップし、終了後はシステムをダウンして片付けるだけで、非常に操作が簡単であるという点です。

スタッフがeラーニング収録システムを、TAがリモート講義のシステムを起動し、私は自分が映っているモニターを見て、スクリーンの位置に合わせてカメラの角度とズームを調整してもらいます。パソコンの映像と音声のケーブルをシステムに接続し、ピンマイクをオンにすれば、後は通常の授業と同じです。プリント資料を読み、パワーポイントのスライドを提示して授業を進めます。必要な場合は、スクリーン上にワープロの画面を投影して、スライドの資料を補足し、講述内容を補っています。

授業の状況と留意点

水曜日の1~2校時のこの授業のために、毎回のプリント資料とスライドのファイルは、前日の正午までにスタッフを通じて配付・送信してもらいました。リモート講義用としては、両地区の担当スタッフに送信して印刷し、eラーニング用としては、サーバーにアップロードしてLMSを通じてダウンロードしてもらいました。

正直に言って、常日頃から資料とスライドを作成しているとはいえ、今回は「送信する」ということが念頭にあり、分量・内容ともに通常よりもかなり充実したものになりました。プリント資料は、最初に表紙を配付し、メールアドレスとホームページのURLのほか、表紙裏にはシラバスを載せました。内容は両面印刷とし、最後に大学のロゴマークを入れた裏表紙を配付して、綴じると小冊子になる形式です。全体で60ページ近くになりました。またスライド資料は、1回につき、スライド12面とし、6面ずつ両面印刷して1枚ずつ配付しました。そのほか、感想文用のコメント用紙も、遠隔キャンパスにはLMSとファイル添付によりして送信してもらいました。



学生の受講態度は、他の授業と同じく、概ね真面目で、静かであったと思います。ただし、eラーニング授業に要求される双方向性を確保しようと考えました。2~3回で1章完結の順序ですから、各章ごとに感想文を書かせて提出させました。また、各章の終わりごとに、TAにマイクを持たせて教室からの声を拾おうとしましたが、これは遠慮してか発言もなく(感想文にはいろいろ書いてくるのですが)、また時間も足りずに実質的な成果は上げられませんでした。オフィスアワーを設定し、メールアドレスも伝えてありますが、ごく少数の質問しかありませんでした。公開検討会の席上でも、双方向性の確保についての疑問が出されましたが、確かに課題であると言えます。

その他、留意したことと言えば、スライドのフォントをやや大きくしたこと、マイク音量に注意して大きめにしたことくらいで

す。スタッフとTAが非常に有能な仕事ぶりを見せてくれましたので、きわめて円滑に進めることができたというのが実感です。成績評価はリモート教室も含め、ウェブ上ではなく、レポートを紙で提出させて評価する一般的な方法を用いました。

また、受信側からの意見としては、多くの大学から普通に視聴できるというご報告があったものの、一部の大学からは、正常な視聴は困難であるという意見もありました。これは、回線の容量の関係が大きく、その証拠に、同時に回線が情報処理の授業などで使われている時に、特に問題があると言われたことから分かります。今後、コンテンツの精度と回線そのものの改善とを含めて、考慮して行かなければならないと思われます。

さらに、eラーニングの場合には、送信する資料類の著作権への配慮が必要となりますが、今回は試行ということもあり、ほとんど配慮を行いませんでした。ライブストリーミングの場合は通常の授業と同等の著作権への配慮が必要ということですが、オンデマンド化する場合には、いっそうの配慮が求められることとなります。今後、本格的にeラーニングが開始される際には、必ずや明確な指針が必要となることでしょう。

eラーニング普及の現状と展望



大学コンソーシアムやまがたでは、参加9機関の間で包括協定を結び、平成18年度より単位互換を始めます。それに伴い、県内各地に散在した大学・キャンパス間をeラーニングのネットワークで結び、単位互換を実質化させなければなりません。コンソーシアムではこれを、平成18年度からの3年計画で推進しようと構想しています。さしあたり最初の平成18年度においては、山形大学の教養教育の授業の一部をeラーニング化して、他大学に提供するという形を取ります。そこで、まずは山形大学において、eラーニングのコンテンツを定常的に作成する基盤を作って行かなければなりません。

今回、平成17年度後期の間を通じて、eラーニングの実験を行い、様々なノウハウと留意点を蓄積しました。今後はこれを元にして、広く学内外に普及を図らなければなりません。2月6日には、高等教育研究企画センターが主催して、学内向けeラーニングの説明会を開催し、2月20日には、第1回パワーポイント講習会を開きました。今後も、コンテン

ツ化と視覚教材作成に関する講習会等を、断続的に企画していききたいと思います。またこれらと並行して、学内にeラーニング授業の募集を行い、相当数の応募がありました。



山形大学としては、eラーニングの普及は、YU-SUNY事業(NY 州立大学との提携)、エリアキャンパスもがみ事業、あるいは小・中・高大連携事業など、現在推進中の多くの教育を通じた国際または地域貢献・連携の事業に、新たな可能性を開くものでもあります。今回の実験はまだ素朴な段階ではありますが、これらの端緒となれば幸いです。